ひとが生まれる

五人の日本人の肖像

鶴見俊輔

ちくま少年図書館19
歴史の本

ひとが生まれる

五人の日本人の肖像

鶴見俊輔

ちくま少年図書館19
歴史の本

281／ひとが生まれる—五人の日本人の肖像—

著者略歴

1922年，東京都に生まれる。ハーヴァード大学を卒業。哲学専攻。京都大学，同志社大学などで教職についた。『日常的思想の可能性』『限界芸術論』『不定形の思想』など多くの著書がある。

筑摩書房／1972年初版
246pp／18.8cm／四六判

1972年7月30日　第1刷発行
1982年4月15日　第8刷発行

著　者©鶴見俊輔（つるみしゅんすけ）

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社筑摩書房（ちくましょぼう）
東京都千代田区神田小川町2—8
電話　東京 (291) 7651（営業）
(294) 6711（編集）
郵便番号101-91／振替・東京6-4123

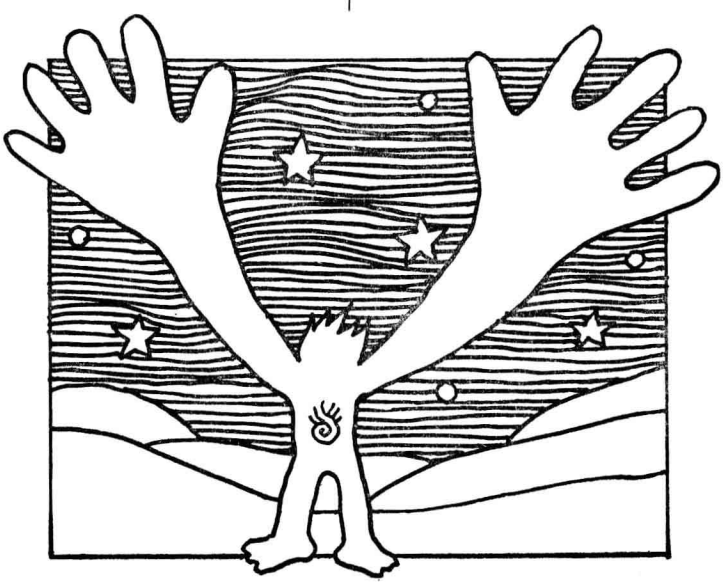
Printed in Japan　厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8023 (製品) 04019 (出版社) 4604

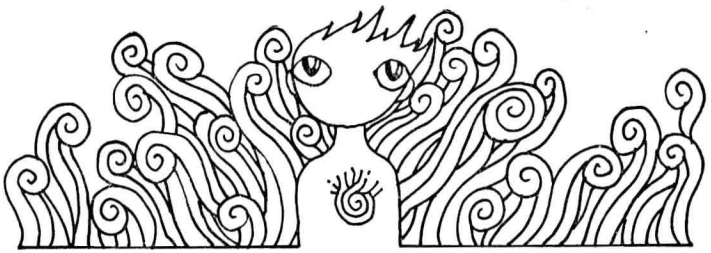
乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読書係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ひとが生まれる

——五人の日本人の肖像——



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.



もくじ

はじめに……5
中浜万次郎——行動力にみちた海の男……8
田中正造——農民の初心をつらぬいた抵抗……65
横田英子——明治の代表的日本女性……118
金子ふみ子——無籍者として生きる……183
林　尹夫（ただお）——死を見つめる……231
関係年表……240
あとがき……244

さし絵　佐々木マキ

はじめに

人間はいつ自分になるのか。

人間は、生まれた時に、いきをする。手足を動かす。その時に木の枝などにぶら下がらせれば、けっこうぶら下がれるそうだ。手をひいて歩かせれば歩けるそうだ。

そういうことは、生まれてからすぐにまた忘れてしまうけれども、それにしても、私たちが自然に知っていること、なんとなく覚えてしまっていることは、じつにたくさんあるものだ。

そんなふうにして、なんとなく私たちはことばを覚え、人間としてのいろいろのしぐさを覚えてしまう。それでけっこう暮らせる。

ところがそのうちに、なにか変なことが起こる。いままで自然に覚えたことでは、どうにもそこをこえられない。

今まで自分にそなわった力では、それとかくとうしても、組みふせることができない。そういう恐ろしさの中から、あたらしい自分が生まれる。

そういう自分の誕生の時は、生まれてから何年目にくるといえない。いつとはなしに自分が自分になっていたという感じの人も多いと思う。

ずっと前に私は、大学の一年生に自分の最初の記憶について書いてもらって、びっくりしたことがある。最初の社会的事件の記憶として残っていることが、何歳の時のことであったか、あまりばらばらに分かれていたからだ。

子どもの時に満州（中国東北部）で戦争の終わりを迎え、ソヴェト・ロシアの兵隊が自分たちの家族に襲いかかってきたという経験を書いた人の場合などは、小さい時に起こったことでも、じつにはっきり覚えていた。空襲で自分の家が焼かれたという記憶も、小さい時でもはっきり残っていた。しかし、そういう特別なことに会わない少年にとって、はじめてのはっきりした記憶は、ずいぶんあとになってできる。

自分が、どういう時代のどういう世の中に生きているのかというふうに、自分を社会の中の一人としてとらえることが、いつある人にとって起きるかには、いろいろの場合があ

る。だが、人間が、隣の人と違うからだとこころをもって個人として生きているからには、社会の中の一人として自分をとらえる時が、いつかは、やってくる。

私はこの本の中で、自分の誕生の記録の残っている五人の人について書いてみたい。この五人の誕生の記録をたどってゆくと、そこに日本の姿が現われてくる。そのように、この人たちは、日本の社会の歴史と深く結びついていた。

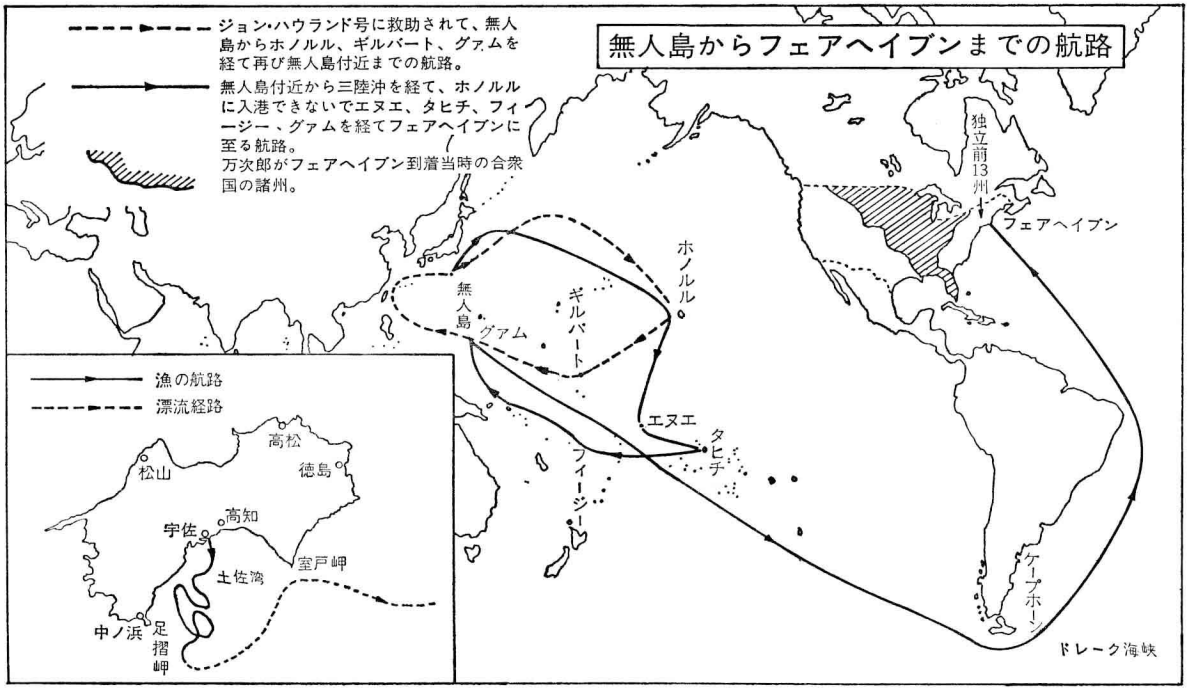
中浜万次郎——行動力にみちた海の男

一八四一年の六月二七日、北アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号が、太平洋上の小さい島に近づいた。そのころの捕鯨船は故国を離れて二年も三年も航海する。陸地に寄らないで何か月も走ることがあるので、水も食べ物もたりなくなる。この日も砂の中に埋まっているウミガメの卵をとろうとして、この島に来たのだった。

北緯三〇度、東経一四〇度のところにある鳥島という島である。当時その島にはまだ名まえもついていなかった。前にだれかが名まえをつけたことがあったとしても、ハウランド号の乗組員はそれを知らなかった。

アメリカ人が二そうのボートを出して、この名もない島にのぼってみると、そこに五人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.


無人島からフェアヘイブンまでの航路
ジョン・ハウランド号に救助されて、無人島からホノルル、ギルバート、グァムを経て再び無人島付近までの航路。
無人島付近から三陸沖を経て、ホノルルに入港できないでエヌエ、タヒチ、フィージー、グァムを経てフェアヘイブンに至る航路。
万次郎がフェアヘイブン到着当時の合衆国の諸州。
独立前13州
フェアヘイブン
ホノルル
ギルバート
無人島
グァム
エヌエ
タヒチ
フィージー
ケープホーン
ドレーク海峡
漁の航路
漂流経路
高松
松山
徳島
高知
宇佐
室戸岬
土佐湾
中ノ浜
足摺岬

の人間がいた。

一人は万次郎。四国の土佐（いまの高知県）、足摺岬の中ノ浜の生まれで、一四歳。そのほかに船頭の筆之丞、三六歳。筆之丞の弟、寅右衛門、二四歳。同じく筆之丞の弟、重助、二三歳。筆之丞と同じ村に住む五右衛門、一四歳。

万次郎のほかの四人は、宇佐という村の生まれで、この舟も、宇佐の徳右衛門という人の持ち舟だった。万次郎だけが、足摺岬に近い中ノ浜から来ており、この舟ではいわばよそものだった。

五人は、この年の一月二七日（旧暦では正月五日にあたる。正月の祝いをすましてすぐ出たことになる）、長さ二丈五尺（一〇メートル）ほどの舟に乗り組んで漁に出た。ハエナワといって、つり針のついた糸のたくさんついている長い縄をおろして、魚をとる舟だった。

アジ、コダイ、サバなど、かなりの獲物がはじめにはあったのだが、漁に熱中していてきりあげる潮時を失った。気がついた時には、まわりに仲間の舟が見えない。帰ろうとするうちに、（一月二九日の）夕方になって、万次郎の故郷に近い足摺岬の東の沖であらしに襲われ、陸から遠く流されてしまった。

◀ 中浜万次郎

あらしとたたかうあいだに、かじも、櫓も折れたり、流れたりして、使えなくなった。夜があけると、見なれた故郷の山が見えたので、助かるのではないかと思っていたが、いたずらに山を見ているだけのことでなにもすることはできず、舟は、黒潮にのってものすごい速さで東南にむかって流されてゆき、やがて海のほかにはなにも見えなくなった。

つかれたからだにとって、たえがたいほどの寒さだった。

「神さま。仏さま。なんとかして私たちを助けてください。生まれ故郷に、かえしてください」

と、かれらは、口に出して祈るほかなかった。

はじめに一斗（二斗とも言う）ほどの米をつみこんでいたが、それも食べてしまい、あとはつりためておいた魚を焼いて食べていた。あらしにあうまでに相当の獲物があったので、まだ食べきれないほどだったが、しかし、かんじんの水がもう尽きかけていた。真冬だから、すぐに手足がかじかんでしまって、文字どおり手も足も出ない。

二月四日の昼すぎ、とおくに鳥が見えた。

「あれは、藤九郎という鳥だ。あの鳥の見えるところには、きっと島があるぞ」
と、年輩の筆之丞が、言った。
「島であってほしい。どんな島でもよいから、どうかその島に、流れつかしてほしい。」
一同はそう言って、また、神と仏に祈りつづけた。
その日の夕方、折れた櫓をあやつって、ようようにこぎつけてみると、それは、まぎれもなく、一つの島だった。しかし、五人は皆が皆、もうへとへとに疲れていて、見知らぬ島にあがってみようという元気がでない。ともかく、一晩、ゆっくり寝てからということで、そこにいかりをおろして、朝を待った。
さいわい、舟には、前につった魚が、いくらかまだ食べのこしてあった。それをエサにして、もう一度ハエナワをつかって、新鮮な魚をつりあげて食べ、元気をつけてから上陸することにした。めいめいが板きれなどをもって力をあわせて岸にこぎよせるうちに、舟は岩にあたってこわれてしまい、やがて沈んでしまった。みんな水にとびこんで、岸に泳ぎつく。一四歳の五右衛門が、一番に磯にあがり、長いあいだ青いものにうえていたので、おもわず磯の草をつかんで食べた。
あがって見るまでは夢中だったが、磯に立ってあたりを見まわしてみると、

「どうも、人の住めるような島ではなさそうだ」
というのが、みんなの感想だった。しかし、もう舟はこわれていて、かえる道はない。
水が、まず一番の問題だったが、こわれた舟から桶一つだけが磯にうちあげられてきたのをさいわいに、これに雨水を受けてためておいたり、岩をしたたるしずくをとって飲んだりして、なんとかしのいだ。
やがて、大きなほら穴が見つかったので、その岩屋を、五人みんなの共同の家にすることにきめた。そこでいつも五人いっしょに暮らし、寒い時には、五人がまるはだかで背中をあわせて一つになり、みんなのきていた着物をよせ合わせていっしょにかぶって、ただふるえていた。
食べ物は、はじめは、藤九郎を手あたりしだいつかまえて、うち殺してたべていた。舟の中に火打ち石をおきわすれてきたので、一同は、火をつくることができなかった（かわいた木をこすり合わせて火をつくる未開時代の技術は、そのころの日本では忘れられていた）。しかし、それでも藤九郎のいるあいだは、この鳥の肉を日にかわかして、たくわえておくことができた。
藤九郎はアホウドリとも呼ばれ、つばさをひろげると、二メートルほどにもなる白い大

きい鳥で、のろまなので、つかまえるのもらくだった。だが、春になると、子どもをつれて、この島から群れをなして飛びさってしまった。

舟がこわれる時のさわぎで、重助はけがをしており、それに腹の調子がわるくなり身動きが不自由だった。中年の筆之丞も、食料不足からだんだんに動きがにぶくなって、岩屋の中で弟の重助の看病をするようになった。

二四歳の寅右衛門と、十四歳の五右衛門、万次郎の三人が、食料採集をひきうけて、島の中をかけまわり、磯の海草をあつめたり、カヤの芽などの食べられそうな草をとったり、貝を拾ったりした。とくに万次郎は、機敏なのでおおいに働いたが、かれだけがほかの四人とちがって宇佐の生まれではなく、それにいちばん年もわかいので、みなにバカにされることも多く、それに憤慨して、とってきた食料をほかのものにやらないと言って抗議したこともあった。五人しかいない島の生活では、一人の力が欠けても、困ったことになる。五人の社会は、かれらの生まれてそだった徳川時代の日本の社会とははっきりとちがう、平等な形のものにかわっていった。

一四歳の万次郎は、だんだんに、みんなに重んじられるような存在になってゆく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.